



アトリエにて、作品「ミカ」と織本さん

輝いています

ひと

彫刻家

おりもとわたる
織本 巨さん

終わり無き探求の旅

「何をかを見つける仕事」。自らの芸術行為についてそう定義し、作品を発表している彫刻家・織本巨さん（55歳・錦町6丁目）。南公民館で3月に開かれた「桜のまち南町文化展」では石膏彫刻作品「ミカ」を出品しました。幼少から粘土遊びが好きだった織本さんは、第二中学校時代に城址公園の「成年式発祥の地記念像」の作者で同校の美術教員だった入江勇氏に出会い、木彫のとりこに。卒業後も同氏の教室に通い、多摩美術大学では塑像を中心に彫刻を学び、若くして数々の賞を受賞します。平成13年にはイタリア政府の招聘を受け給費生として留学し、現地の教

会前などに作品を設置。近年では国内最高峰の「新制作展」で新作賞を受賞しました。廠では作品出品のほか、市展で審査員を歴任し、公民館などの美術講座で教えるなど幅広く活動。「いつか市内に作品を設置できれば」と、内に秘めていた思いを語ります。「見えていないものが見えてくる」と織本さん。長いときは小休止を挟みつつ一日6時間かけてモデルを観察し、その中に自らを投影させ、じっくりと歳月をかけて作品を仕上げていきます。そして織本さんは続けます。「作り終えると、また作りたくなる。ただその繰り返しです」。制作の過程で自分自身から離れていく作品にインスピレーションを受け、新たな創造の地平を見いだすことで、次の制作へ心が駆り立てられていく。完成した作品に再び手を加える別の作品に生まれ変わらせることも少なくないそうです。現在は、今月末から開催される埼玉県美術展覧会への出品に向けて準備を進める日々。「今後も険しい道のりだろうけど、なんとか作り続けていきたいですね」。果て無き芸術の旅に、終着点は見えませんが、

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.36 —



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

美しい遊女が描かれています。豪華な打掛を見ると、帯の布袋と唐子が賽の河原の地蔵と水子の姿になっています。裾に描かれた恵比須・大黒天は地獄の獄卒、宝物が入った大きな壺も、よく見れば亡者が落ちる地獄の釜です。縁起が良いとされたものが反転し、全て地獄を象徴するものとなって描かれています。このことから、女性は単なる遊女ではなく、一休禅師と問答をしたことで名高い地獄太夫であることがわかります。背後の屏風には秋草とむら雲に隠れた満月が描かれ、華やかな美女のはかなさを浮かびだしています。

河鍋暁斎記念美術館 5月1日(水)～6月25日(火)

「暁斎没後130年記念 暁斎の歴史画・物語絵」展
同時開催「暁斎プラスワンシリーズ30 勇の鍾馗」展

開館＝午前10時～午後4時
休館＝木曜日・毎月26日～末日
ところ＝南町4-36-4
入館料＝一般600円 65歳以上500円
高校生・大学生500円 小・中学生以下300円
※65歳以上の人は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください。

詳細＝同館(☎441-9780)
(20人以上の団体は要予約)



暁斎筆「極楽太夫図」
絹本彩色 軸装

本作品は現在の展覧会で御覧いただけます(5月25日まで)